

政務活動調査報告書

調査日	平成29年11月9日（木）～11月10日（金）
視察場所	沖縄県 那覇市 沖縄県立武道館
調査項目	第79回 全国都市問題会議
視察者名	畔柳敏彦 畑尻宣長 野島さつき
市の概要	面積：23.22 km ² 人口：69,119人 人口密度：2,854.3人/km ² 世帯：27,280世帯 経常収支比率：82.8% 実質公債費比率：1.0%

第79回 全国都市問題会議

<テーマ>

ひとつがっなぐ都市の魅力と地域の創生戦略

—新しい風をつかむまちづくり—

11月9日、10日の2日間、那覇市の沖縄県立武道館において、後藤・安田記念東京都市研究所、日本都市センター及び那覇市との共催により2,200名を超える参加者を迎えて開催されました。

<第1日目>

開会式

開会挨拶	全国市長会会長	松浦 正人
開会市市長挨拶	沖縄県那覇市長	城間 幹子
来賓祝辞	沖縄県副知事	



基調講演

「多様性のある江戸時代の都市」

東京大学史料編纂所教授 山本博文

主報告

「ひと つなぐ まち」

—新しい風をつかむまちづくり—

沖縄県那覇市長 城間幹子

一般報告

「人口減少社会の実像と都市自治体の役割」

—人口とインフラの適正な

持続的配置はいかに可能か？—

首都東京大学院尋問科学研究科

准教授 山下祐介

一般報告

「自然と都市が融合し共生が

地域の価値を高めるまちづくり」

北海道釧路市長 蝦名大也

一般報告

「新たなステージに入った沖縄観光」

—複合的な魅力を有する

ハブリッドリゾートへー

琉球大学観光産業科

学部長・教授 下地芳郎

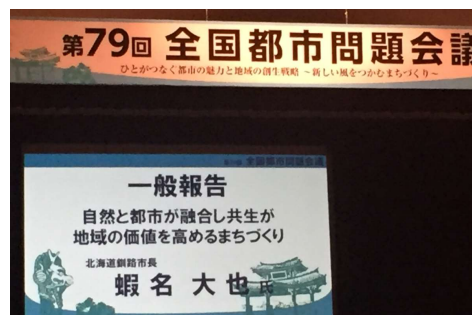
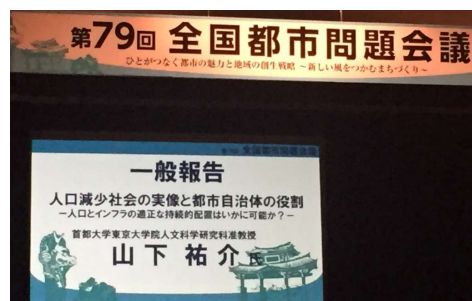
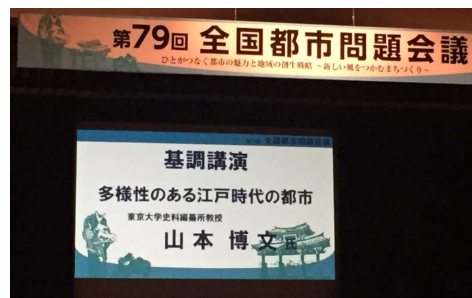
<第2日目>

パネルディスカッション

【テーマ】

ひとがつなぐ都市の魅力と地域の創生戦略

—新しい風をつかむまちづくり—



【コーディネーター】

早稲田大学理工学術院教授 後藤春彦

【パネリスト】

株式会社能作代表取締役社長

能作克治

まちひと感動のデザイン研究所代表

藤田とし子

沖縄文化芸術振興アドバイザー

平田大一

福井県勝山市長

山岸正裕

静岡県島田市市長

染谷絹代



閉会式

時期開催市市長挨拶

新潟県長岡市長

磯田 達伸

閉会挨拶

後藤・安田記念東京都市研究所理事長

新藤 宗幸

<報告と所感>・・・畔柳敏彦

1、 基調講演<テープ起こし文含む>

大変有意義な全国都市問題会議に参加させていただきました。以下の文章は録音によるテープ起こしで内容（所感以外）を記載しております。

現在の都市の形は江戸時代の町が基本となっている。その町の歴史を知ることが、町の魅力を引き出すことにつながる。江戸時代は江戸、京都、大阪に大都市が形成され、各藩に城を中心に城下町ができ、藩の規模にあった都市が形成された。江戸は各藩の江戸屋敷があり、江戸に各藩から武家人口が増え、その需要に併せて職人や商売人が集まり、18世紀では100万人の人口を抱え、ロンドンやパリと並ぶ大都市になった。京都には天皇がいて、伝統文化と伝統工芸品の生産地となっていた。そして大阪は全国の年貢米が集積され取引される地で、江戸時代末期には大阪堂島で世界初の先物取引がされていた。江戸時代は全国に260ほどの藩があり、各藩は城を中心に城下町が作られ、城を中心に上級の家臣団が住む場所、その周辺に下級武士の居住地が、町外れに職人など町人の居住地、その外側に寺が建てられ、城下町は土地の地形に合わせた体系で、敵から城を防御するように作られていた。二万石以下の大名は城がないが代わりに陣屋があり、同じような町の造りとなっている。江戸時代は大都市ができて、各城下町がそれぞれ多様で個性的な発展をしたため、大都市の一極集中というような構造にはならなかったという。

現在の日本の課題である人口減少化現象で地方都市に魅力をいかに作るのかということや、東京一極集中の機能を分散化し、消滅都市に歯止めをかけるなどということも必要がなく、各藩事態に街の魅力が形成されていたのであろうと感じた。

江戸時代の町の発展に参勤交代が果たした役割が大きい。参勤交代に使った東海道や中山道などの街道に定間隔で宿場が作られ、宿場には参勤交代の大名が泊まる本陣や脇本陣、旅籠が作られ、店が宿場町の街道沿いにできた。長崎のオランダ商館から将軍への拝謁に同行したドイツ人ケンペルの「江戸参府旅行記」に、日本人が旅行好きで街道にはいつも大勢の人が行き来し、店が街道筋に連なっていることに驚いていることが記されている。参勤交代は藩の格式を競うイベントであり、参勤交代のための日雇い従者や人足、江戸到着後の帰郷者、お伊勢参りなど街道は賑わったという。特にお伊勢参りについて庶民は伊勢に行くために、講を作り、旅行費を融通しあってまで、伊勢まで行ったという。金毘羅や善行寺など人気の観光地が各地にでき、人の移動が活発であったという。朝鮮通信使、その後の琉球王の参府もあったようであります。参勤交代は人の移動だけでなく文化や情報の交流も果たし、また、江戸住まいで江戸の文化や情報に触れ、それを郷里に持ち帰ることで江戸の文化や情報が地方に広がり、大都市の先進的な文化や情報が地方に広がる原型ができていた。また、江戸時代は蝦夷地の開拓が始まり蝦夷の産品が日本海側の海路で大阪に運ばれ、大阪から商品が北前船で日本海側方面に運ばれた。この北前船海路の港町では庄内藩長方の本間家や高田屋嘉平治など豪商が生まれた。参勤交代は費用がかかったが藩財政の3%程度であった。藩財政の45%程度は藩士の俸禄、江戸滞在費が30%程度、藩内のインフラ整備は20%程度しか使えなかった。藩士の俸禄や江戸滞在費は固定費のようなもので削減できないため、参勤交代の従者の旅籠代の交渉をしなければならなかった。参勤交代の時は藩の格式で通過する藩への挨拶や離合時の挨拶がなされた。宿場の本陣は幕府がその土地の名主など有力者に土地を与え、代わりに人足の準備や馬の準備の負担をさせた。参勤交代の前の年には、藩は本陣と旅籠の予約をして陣割りを行い、関札を本陣に渡していた、関札の名残がホテルや旅館の案内札であり、本陣では土地のものを献上しており、本陣と大名ともつきあいもできていたという。幕末に参勤交代を大幅に緩和し、江戸藩邸から妻子を藩に戻して参勤交代をなくしたが、参勤交代がなくなったことで宿場町は衰退していった。今日、通信手段や交通手段が発達し、観光的に見ても滞在型がへり、通過型観光になり、地方都市は衰退してきている。日本人は元来、旅行好きであり、それぞれの町の歴史を知ることで町の魅力を再発見できるのではないかという趣旨の基調講演でありました。

<所 感>

地方創生、地方の時代はその都市での雇用安定、結婚、子育てのしやすさ、教育費の負担軽減、奨学金の返済負担軽減、定年後もその力を活かせる仕組み、交通の利便性、地域包括ケアの仕組みの充実などの社会保障の安定性。地域のコミュニティーの豊かさなどが地方都市は住みやすさの仕組みを作り上げることが必要であると感じた。都市の歴史的魅力づくりや健康づくりの環境とあげればきりがありませんが、そこに住む人々がそれぞれの人生に希望を持ち、その地で人生を完結したいと思えるような魅力を公民連携の施策で実現していかなければ都市の繁栄はないのかとも思慮される。

2. 那覇市長より那覇市の取り組み・紹介報告者：城間幹子那覇市長

那覇市は古くから東南アジアの各都市を結ぶ交通の要衝地として発展してきた。那覇空港及び那覇港を要する「沖縄の玄関口」であり、2000kmの円周域に東京、香港、ソウル、

北京、マニラなどの国内外の主要都市を含む地理的優位性から沖縄国際物流ハブが構築されアジアとの商業物流拠点として注目を集めている。那覇市は、人口約32万人、中核市となり沖縄県での中心的な位置を占めている。近年はアジアを中心に外国からの観光客が増えており、那覇空港に滑走路2本化、那覇港のクルーズ船着岸施設の整備が進んでいる。昔より、琉球王国の王都・商都として栄え、アジアとの交流の歴史があり「人のつながり」が大切にされてきた。戦後本土復帰後は環境整備され沖縄らしさが失われたと言われるが、路地には沖縄らしさが残っている。那覇市の新たな取り組みとして、老朽化している公設市場の建て替えを行い、地元の人たちが利用できる施設であるとともに沖縄の文化と暮らしが観光客に楽しんでもらえる街づくりを進めている。また、沖縄の伝統文化の継承や文化の創造発信の拠点施設として市民会館機能を維持した「新文化拠点施設」の建設を進めている。那覇市の取り組みとして新しい地域コミュニティづくりとして、市民、NPO、企業、との共同の街づくりを小学校校区単位で進め、また、地域の力を生かしてこどもの居場所づくりによる食事や学習支援、生活保護家庭、準生活保護家庭などへ保育料や学童保育費の減免などこどもの貧困対策に取り組んでいる。近年、都市化の進展や市民意識の変化から市民と行政を結ぶ自治会加入率は低下し、会員の高齢化・次世代の担い手不足などの課題が顕著にあらわれてきた。まちづくりについて積極的な活動をしている方に対して「那覇市民協働大使」として委嘱をし、さらに「那覇市民協働大学」や「那覇市民協働大学院」を開講し、新たな地域リーダーの発掘・養成に取り組み、地域における新しい風を生み出す人材育成に取り組んでいる。また、沖縄はこれまで長寿県No.1であったが、近年食事の欧米化が進み健康寿命が低下している。市民・関係機関・企業・団体などで「健康づくり市民会議」を発足し健康づくりに取り組んでいる。市民に健康づくりの食事の呼びかけをするとともに、食品店やレストランなどのメニューに健康メニューを出す店を登録する仕組みをつくっている。多様性のある街としてLGBTの方にパートナーシップ証明書の発行をしている。「平和・こども・未来「ひと つなぐ まち」」をキャッチフレーズにしており、アジアに開かれた市、躍動感溢れる万国津梁のまち「那覇」を目指すとビジョンを披露されました。

<所 感>

沖縄といっても広いわけですが、那覇市はとりわけ都市化の進展が進み人間関係の希薄さを感じるといわれていますが、国際観光都市であり、魅力満載のリゾートであるという印象を持っていました。今でもそのイメージは変わらないと思うが、国際都市という表の反面、市民の生活は厳しいものがあるのだと感じた。貧困対策の事例は全国共通の大きな問題群なんだと改めて思いました。特に沖縄の人々の人間関係は私たち岡崎の人たちよりも絆が強く地域の連携も群を抜いていると思っていました。ところが、沖縄で自治体加入率が低いとは信じられない言葉でした。人と人の連帯づくりはこれからの地域づくりとして、いかに住みやすい地域を創るのか、それは人と人との心の通う地域であることに異論はないと思うのですが。新たな地域リーダーの発掘と養成、人材育成の取り組みを注視していきたい。しかし、本市も例外なく沖縄と同じく新たなジェネレーションの人材発掘は喫緊の問題である。市議会としても一議員としてもこの問題を克服しなければ地方創生はありえないだろうと考える。

3、一般報告1 テーマ：人口減少社会の実働と都市自治体の役割

〈人口とインフラの適正な持続的な配置はいかに可能か〉

講師：山下祐介首都圏大学准教授

語源を見ると都市は都(みやこ)+市(いち)であり、都(みやこ)は宮+処で王が祭事や政治を行うところである。市は斎(いつき)+ちで、祈祷により結界を張り、その中で人々が自由で対等に交流する場を意味している。国が成立する前提は政治・軍事・催事を行う大きな集団・社会が出現し、都市ができる。その国を支えるものは村・邑(まち)であり、家族が集まったところが村・邑(まち)があり、村・邑が集まり国になる。村・郷(村むら)は群れを指し、村・邑は国のおかげで人々が楽しく暮らしている様子を指している。町(まち)は間+「ち」で、国が「ち」を区切った場所を指す。「ち」は力・税あるいは血・乳を意味する。村・町・都市をむすぶ道は御+「ち」であり、王の力につなげるものを意味する。

この視点から都市を見た時、都市は村・町から道を通して税(ちから)を集め、また道や市、町を通じて国の税(力)を各地に与える結節点である。「ちから」の循環はヒト・モノ・カネ・情報の循環を実現させる。「ちから」の循環によって各地が富み栄え、また国家は「ちから」をさらに蓄え、外の「国家」と対抗するために必要な力を蓄える。このように、都市魅力は単独で何かであるということではなく、力を集めその力を国家に与え、国家が地方へ力を配分するシステムの中心であり、ヒト・モノ・カネ・情報が行き交う場であることにあ

る。都市化は、経済効率は上がるが生活の質は低下する。これまで地域で共同して解決してきた問題を行政や市場に求めるようになり、行政への依存が高まり、家や地域での解決能力が低下してきている。バブル期には政治はばらまきにより地方や住民の国への依存を強める働きをしてきた。国と地方、住民と行政は依存関係にあり、よい依存と悪い依存がある。新たな価値を創造できる関係を作ることが必要である。そのためには空間的な分析だけでなく、世代間という時間軸を構想した分析が必要である。これからは市民と行政の協働によって、人生と政治が結びつき、地域社会を再生させることが重要である。

しごとづくりの問題は地方に仕事がないわけではなく、担い手(特に若い人)がいなくなっている問題である。若い人が地方に残らない理由は職業威信の序列(東京が上、地方が下、高次産業が上、農林漁業が下)という心理的・価値観の問題がある。近年、教育現場では英語教育に重点が置かれ、経済中心・国際的ビジネスマンを育てる教育がなされている。このような教育のあり方が文化に対する意識を壊している。多様な価値観と文化を大切にする教育を進めることで、職業威信の序列化を解消させることが求められる。また、地方で暮らすことの不安を取り除くにはインフラ整備が必要である。人口減少が進んでいる地域は人口減少により財源は減少し、必要なインフラやサービスを削減せざるを得なくなり、人口減少はさらに進む。この悪循環を断つには、地方に財源を分配し、必要なインフラやサービスを提供できるようにしなければならない。

また観光政策の視点で見ると観光はヒトの交流であり、多様な文化を認め合うことが重要である。ナショナリズムは排除と依存を産む。多様性を否定し画一化が進むと依存が強まり、ヒト・モノ・カネ・情報の交流がなくなり経済力を失うことになる。ナショナリズムは社会

心理から始まる問題で、教育の問題でもある。多様な文化を大事にする教育から国際的なビジネスマン育成に力点を置くような教育のあり方は多様な価値観が育つことを阻害し問題である。観光政策は多様な文化を受け入れることにある。という考えを示されました。山下准教授の説は凡そ理解出来るが「近年、教育現場では英語教育に重点が置かれ、経済中心・国際的ビジネスマンを育てる教育がなされている。このような教育のあり方が文化に対する意識を壊している。多様な価値観と文化を大切にすることを進めることで、職業威信の序列化を解消させることが求められる。」の考え方を示されました。

<所 感>

若者が大志を抱いて世界で活躍することは肯定しなければならないことであります。国際ビジネスマンにならずとも英語は今や必須のことであり、インバウンドにおいても外国人とのコミュニケーションは必要であります。英語力とともに必要なことは、自分が住んでいるところの歴史的資産や伝統文化の魅力など知ること、誇りを持てることに主眼を置くべきであり、日本の歴史、地元の歴史など理解し行くことが、郷土に戻って来ることにつながるのでは思います。人口減少つまり、生産年齢人口をいかに増やせるか、それが准教授の言われている税収の減少が財政の悪化となり、都市の魅力であるインフラ整備が進まないことにつながるといわれています。その通りかもしれませんが、今や田舎暮らしを求める風潮やニーズ、人生100年時代を迎え、高齢者の仕事をする期間や年齢が拡大。待機児童問題が解決されれば主婦層の社会進出も増加し税収も向上するという要素にも視点を置くべきではないだろうか。

4、一般報告3

テーマ：新たなステージに入った沖縄観光 報告者：下地芳郎琉球大学産業科学部長・教授

沖縄の観光は「青い海・青い空」のイメージが強いが、琉球国時代からの中国や東南アジアとの交流による特異な文化が形成されている。首里城などが世界歴史遺産に指定され、「沖縄の歴史をどう生かすか」が課題になっているがさらにビジネスやMICEなどハイブリッドな観光産業が求められている。沖縄経済の基地依存は5.7%でしかなく、観光産業が沖縄の経済を支えている。米軍基地の返還と返還地の活用が課題である。

1972年に本土復帰になったが、当時は慰問観光が主流であった。1975年に沖縄振興策として海洋博が開催され、空港・道路・上下水道などインフラの整備、リゾートホテルの建設が進み、沖縄の観光は「青い海・青い空」のビーチリゾート観光が始まった。また、首里城が復元され観光産業は活性化した。多くのホテルが作られ観光客の受け入れ体制ができ、修学旅行などの誘致されてきた。2000年には沖縄サミットが開催され、沖縄の知名度が高まった。近年、円安、ビザの緩和、消費税免税、またLCCによる外国航空路線の拡大やアジアからのクルーズ船が寄港するようになり、観光客が急増している。外個人観光客の増加を受け、沖縄では外国人目線でのアピールに取り組んでいる。同時に、観光客の増加は新たな課題を生んでおり、観光資源と県民の生活環境保全による持続可能な観光産業にするための取り組みが求められている。

今後の課題は観光の質の向上と観光のハイブリッド化がある。質の向上として、那覇空港

の第2滑走路完成と新ターミナルの建設、クルーズ船対応のインフラ整備、那覇軍港跡地活用計画当インフラ整備、サービスの向上、人材の育成や観光危機管理の強化などの観光経営の強化が求められている。沖縄県では、コンベンションビューローが観光産業に関するパンフをつくり、小学校4年全員に教材として使用している。また、ICT活用やAIの活用を進めている。

環境産業のハイブリッド化はこれまでのリゾート観光だけではなく、ビジネスリゾート、MICEの誘致を進める。そのために、沖縄が持つ地理的な条件であるアジアのバブ機能と、那覇市が持つ「日本、アメリカ、中国」の文化が共存している特徴を生かしていく。

<所 感>

岡崎市は沖縄のような国際都市ではないので非常に海のあるリゾート地としての多面的な観光施策に驚かされる。リニアが名古屋へ来た時を想定してのアクセスの課題が重要であると思う。徳川家康生誕地・岡崎というブランドをいかに旅行者に印象付けられるのかが観光客呼び込みの生命線であるという気がしてならない。そのためには、名古屋めしならぬ岡崎めしを完成させること、宿泊できるホテルの誘致、30分から1時間以内での観光施設へのアクセス可能な交通体系の確立がされなければならない。

<パネルディスカッション>

時間：9：30～11：45

パネリスト：染谷絹代静岡県島田市長、山岸正裕福井県勝山市長、平田大一沖縄文化芸術振興アドバイザー、藤田とし子まちとひと感動デザイン研究所代表、能作株式会社能作観光部部长

コーディネーター：後藤晴彦早稲田大学理工学術院教授

染谷： 島田市は人口10万人、高齢化率29.9%、2060年の推計は人口6万人、高齢化率36.8%となっている。このような状況を踏まえ、量から質の転換するまちづくりとしてまちの「縮充」を目指している。「人が育つ・人を育てるまちづくり」を進めており、地域資源を再発見し、市民と行政の協働で行政のスリム化と市民生活の充実、地域産業の活性化を図っている。市民参加型プロモーション事業として緑茶化計画が作られ、島田産お茶のブランド化と商品開発、市のイメージカラーをお茶のグリーンとし、市のシンボルのデザインを公募で行った。島田産お茶は東京のデパートでブランドとして販売されている。

また、パラグライダーパーク、大井川鉄道橋側に休憩施設をつくり名所化、市民協働で開催するマラソン大会、若者によるまちづくりが取り組まれている。また、農協、高速鉄道、大井川鉄道、島田市の4者の連携で高速道路高架下に農産品・海産物の販売、SLが見えるカフェやレストランなどの地域の賑わいの拠点を整備している。国は地方の取り組みに素早く対応できるよう規制緩和してほしい。

山岸： 勝山市は人口2万4千人の町。1988年に恐竜の化石は発掘され、その後日本の恐竜化石の多くが勝山市で発掘され、2000年に県立恐竜博物館が建設され、年間90万人を超える入館者で賑わっている。また勝山市は縄文・弥生時代の遺跡、奈良・平安時代に

栄えた平泉寺、明治近代化を担った繊維工業の産業遺産、江戸時代から300年の伝統がある「勝山左義長まつり」などの歴史遺産がある。

2009年新たに勝山市全体が「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク」に認定され、ジオパーク協議会にエコパーク協議会を組み込みしてエコパークミュージアムと連携活動をしている。国は地方の先進的な取り組みを積極的に支援してほしい。

藤田： 千葉県柏市でJR柏駅前に設置された官設民営の「かしわインフォメーションセンター」の事務局長を引き受けた経験から、まちの魅力と新たな地域価値の創造について語った。市民が主体的に受けとめて行政とともに協働するためには、「場と仕掛け」が必要。市民は経験知がなく自分たちで活動を作るノウハウを持っていない場合が多い。担い手を育てるには、多様な人が係わる活動のプラットフォームをつくりが重要である。

能作： 株式会社能作は青銅鑄造メーカーである。仏具や茶道具の鑄造から医療機器の開発を手がけている。富山市に本社があり、12の支店と海外に3カ所支店を持っている。能作は製造だけでなく「産業観光」に取り組んでいる。製造現場の見学と製造体験ができ、製品販売とレストラン・カフェの営業、観光案内をしている。「産業観光」を展開することで地域に貢献している。地域で観光の軸となり、地域の観光振興となっている。職人芸を見てもらうことで地域に誇りを持てるようになり、ものづくりに係わる若者が増え、技術の継承と地域の活性化につながっている。また、ものづくりのデザインがアートの域になり、デザイナーを目指す若者が出てきた。今後アミューズメントパークのような取り組みにすることで「産業観光」をさらに発展させたい。「産業観光」に取り組んだことで多くの人が会社を訪れるようになり、社員の意識改革が進み、社員のモチベーションが上がっている。

平田： 観光産業は感動産業であり、感動を生む文化・芸術および同様に感動を生むスポーツを観光事業と合体させ、沖縄の新しい観光のあり方を作ってきた。具体的にはシンボルとなる拠点の整備、文化と観光とを統合、アーツカウンシルを設置し団体を支援し、活動する団体の法人化を進めることで持続できる活動団体に育ててゆく、そのために補助金の交付においてプロモーション能力をつけさせ自立できるように人材育成の場とした。

後藤： まとめ。人口減少・超高齢社会を迎え、豊かさを維持するために「縮充」という概念は重要。そのために住民と行政が協働でまちづくりを進めるには「場と仕掛け」が重要である。「場と仕掛け」を作る時にボール(課題・問題提起)の投げ手と受け手が重要であり、住民と行政をつなぐ役割を果たす受け手をどのように構想するかが課題である。

<所 感>

観光は人と人との交流であり、まちの文化・歴史・自然・産業を知ることでもちの魅力が再発見し、新たな発見が新たな感動を生み、人を引き寄せる。まちづくりは多様な人の交流と自ら参加することで人ゴトから自分ゴトになる。そのために「場と仕掛け」が重要であると考えます。地方創生として観光産業が一つの選択であります。都市問題会議に参加して感じることは、それぞれの自治体はその街にある特産品や歴史的資源などをブラッシュアップして独自の魅力発信をされている。それがブランド化となり、他の街との差別化が図られています。今、岡崎の観光を考えると岡崎の独自のものは何なのか、八丁味噌を軸とした味噌文化なのか、備前屋をはじめとした和菓子文化なのか、ブドウなのか、蠟燭なのか、あま

りも多種多様であります。歴史的資産としては大樹寺、伊賀八幡宮、滝山寺東照宮なのか、法蔵寺なのか、六所神社なのか、岡崎城なのか、それぞれ単独で魅力があるが、それぞれが連携していない状況である。岡崎市はそれらを連携させていくために乙川リバーフロント地区整備計画を軸とした公民連携事業を具体化させ、観光産業都市の実現に向かいインフラ整備が着実に進められている。その先にはすべての点が線から面へと繋がれたとき、はじめて有機的に魅力が発信されることを確信するものであります。これらの事業の帰着するところは「ヒト・モノ・カネ・情報」が循環する仕組みづくりを進め、「楽しい街・魅力ある街」そして「稼げる街・岡崎」を創出していかなければならないと決意した。

<所 感>・・・畑尻宣長

今回の全国都市問題会議では、まちひとしごと創生総合戦略における課題などを考える上で大変参考になることが多い会議であったと思いました。

基調講演の東京大学史料編纂所 山本博文教授による「多様性のある江戸時代の都市」として、江戸時代に行われた参勤交代がもたらした効果を通し、都市機能、まちづくりを教えてくださいました。この江戸時代の町の特徴として、城下町、宿場町、門前町、港町など多くの町が発展しました。よく表される石高は、現在の人口3万人の都市は、3万石。人口10万人は10万石であり、2万石以上で城を持っていたようです。その下には陣屋を形成しまちが作られていきました。隔年で行われていた参勤交代は、街道と宿場町の発展をもたらしました。江戸幕府は、街道を整備し、宿場を置き、公用の人馬の提供を義務付けていました。ですので、毎年多くの大名が参勤交代で宿場での宿泊をしたり、休息をしたりと、宿場は繁栄をしました。やがて庶民の旅行も行われるようになり、特に注目されるのは、伊勢参りであったそうです。伊勢に行くために講を作り、旅行費用を融通しあって伊勢神宮に参ったそうです。その他には、善光寺、金毘羅宮など人気の観光地が各地に成立し、人の移動が活発になっていきました。そういったことが、お金がまわり、地域の産業が発展していく基礎になっていったんだと感じました。それが各都市の財政力となり、さらに都市機能を強固にしてきた歴史であるとも思います。今でいう観光産業が、地域経済の支えになってきた側面をどう生かすかが、本市にとっての課題でもあると思いました。

次に主報告として沖縄県那覇市の城間幹子市長よりテーマでもある「ひと つなぐ まち」—新しい風をつかむまちづくり—と題しての講演でした。那覇市の魅力は、琉球王国の王都・商都としてアジアとの交流を軸に発展してきたことにより、「ひととのつながり」を大切にしてきた。これが沖縄の文化の歴史であり「おもてなし」の心で歓迎してきたということでした。沖縄県は本土復帰45周年を迎えた。復帰後の沖縄振興支援策により、空港、港湾、モノレールなどの交通インフラや公共施設をはじめとする都市環境整備は着実に進んできたが、その反面、沖縄らしさが無くなってきているという。実際、少しではあるが、街中を散策してみた。古い公設市場周辺は、昔ながらの佇まいを残しているように感じた。しかし、新しいお店なども見受けられる国際通りは、観光という点から魅力的な部分とそのほかの歴史的な部分とが交錯していたというのが率直な感想です。さらに、大型クルーズ船の就航による、外国人観光客の急増はさらなる観光産業の発展が進んでいるように感じました。そう

いったことばかりでなく、健康面、長寿ということに関しても、「健康なは21」を策定し生活習慣病予防にも力を入れています。また、地域の特色として人種に関する人権問題にも取り組んでいて、平成27年7月には全国2例目となる「性の多様性を尊重する都市・なは」宣言（レインボーなは宣言）を行っています。先進的に人権問題に取り組んでいることがわかりました。那覇市は、アジアに開かれた市として、国内外から優れたヒトやモノが集い、そこから新しいモノやコトの付加価値を生み出すとともに、ひとつがつなぐまちへの躍動感みなぎる万国津梁のまちを目指す意気込みが感じられました。

一般報告として、首都東京大学院尋問科学研究科 山下祐介准教授より「人口減少社会の実像と都市自治体の役割」—人口とインフラの適正な持続的配置はいかに可能か？—と題しての講演です。国と地域のバランスについて考察されていました。人口減少を防ぐ為には、仕事づくり、稼ぐ力が必要になってきおり、地方自治体の財政力に余力がなければ、国からの補助金を当てにしなくてはならなくなり、常に国からの脅威にさらされているという現状にあるということです。それがさらに、東京一極集中を招く原因でもあると言われていました。観光を分析すると、ホテル、宿泊施設や物流はしか儲からない。これでは稼ぐ力にはならない。ここで交流やおもてなしをすることで稼ぐ力の分配にシフトできるかどうかがかギとなるため、本市でも進めている観光に対して、少し方向性を変えていかないと従来の観光では産業として成り立たないのではないかと考えさせられました。また、人口ビジョンについての考察は、計画による人生は見えてこない、人生が重ねられない、いわゆる時間軸がないので、世代ごとに読み解いていくことが大事であると言われていました。まちひととごとの創生総合戦略の基となる人口ビジョンですが、そこに世代ごとを加えることで見えてくることがあるように感じました。今後の人口ビジョンを活用していくときに参考にしていきます。

次に、北海道釧路市 蝦名大也市長から「自然と都市が融合し共生が地域の価値を高めるまちづくり」と題しての講演です。価値を高めるということを数値で表す、ひとつつうえのまちづくりを目指している内容をお聞きしました。地方から都市への流れを転換するのが地方創生への流れであるが、人口が減るということを大前提で施策を実行していくことが大事であると言われていました。先を見越しての話が多い中で、現実には釧路市長の言われる通りであると思いました。国の観光立国ショーケース・国立公園満喫プロジェクトに、長崎、金沢、釧路が選ばれました。そこで、釧路市はアイヌ文化（先住民族）を110件、アイヌの村として整備しました。そこでは、入込客数から、消費額への考え方をいろいろ考えたそうです。中には、外国人に気づかされることもあったそうです。観光の捉え方、どうお金をまわすのか、本市としても一つの側面として考えるべきことだと思いました。

最後に、琉球大学観光産業科学部長の下地芳郎教授による「新たなステージに入った沖縄観光」—複合的な魅力を有するハイブリッドリゾートへ—と題しての講演です。観光という概念の中に、MICE というビジネスを取り入れることで、さらに幅を広げることが出来るということが、ハイブリッドリゾートの考え方だと教えて頂きました。リゾート型観光を主流の中で、ビジネスでの取り込みをすることで、おのずと観光してもらえるチャンスが広がるということです。実際、今回の全国都市問題会議が那覇市で行われることにより、全国の多く

の市議会議員が訪れています。その経済効果は、大きいと思います。昼の弁当、宿泊施設など、ちょうど閑散期に設ければ、市にとって大きな副産物としての効果が期待できたと思われれます。私自身も沖縄の観光を肌で感じる事が出来ました。小さなお土産物屋でも、おもてなしの気持ちを感じる事が出来たことは、大きな成果でもあると考えています。加えて、日本版 DMO により、質の向上を目指しています。教授が言われる、沖縄観光の地として、観光、学術、ビジネス、平和の交流拠点としてさらに発展を目指していくとの言葉は、とても力強く感じました。

パネルディスカッションでは、伝統産業を活かした、産業観光に成功した事例がありました。そのきっかけは、25 年前に、珍しく親子が工場見学がしたいということで、そこでの何気ない言葉に愕然とし、職人の地位を高め子どもたちに誇りに思ってもらえる職業にしたいという一心で始めたこと、現在は日本版 DMO を目指していることを伺いました。また、柏市の「ウラカシ MAP」を仕掛けた話は、以前、視察に行ったことを思い出しました。市民団体の発想で商店街を発展へと導くヒントがありました。本市でもまちゼミが有名ですが、さらなる活性化のための要素が含まれていると感じました。また、行政マンの立ち位置を超えた活躍が大きく観光産業を後押しした事例がありました。優秀な職員を発掘し、知恵を出し合います。必ず人材はいます。どう活かしていくかは、上司の懐次第というところが非常に危うく感じますが、部下のやる気、行動力を活かせる組織作りは大切だと感じました。

今回の全国都市問題会議は、本市にとってこれから大きく進めていく観光産業についての議題であったため、大変参考になりました。観光産業をどうまちづくりに活かせるのか、人口減少時代に対応できる方策を考えるヒントがちりばめられていました。今後の議会にて様々提案していきたいと考えています。

<所 感>・・・野島さつき

第 79 回全国都市問題会議は、「ひとつながり都市の魅力と地域の創生戦略ー新しい風をつかむまちづくりー」のテーマで、2 日間にわたり開催された。1 日目は、開会式に続き、基調報告、主報告、3 名の方の一般報告。2 日目は、コーディネーターのもと 5 名のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。様々な事例が報告されたが、中でも勝山市の取り組みに感銘を受けた。

福井県勝山市は石川県との県境にある中山間で、人口 2 万 4 千人の自然豊かな小都市である。平成 12 年 (2000 年) に市長に就任された山岸氏は、「あなたと一緒に 21 世紀の勝山をつくります」をキャッチフレーズに「行政がすべての施策の主体になるのではなく、地域住民と一体となったまちづくりを推進したい」との思いを込め、「ふるさとルネッサンス」事業に取り組んだ。地域に誇りを持つ市民を増やしていくことで自主性が喚起され、未来へ発展する新しい視点が開けてくることから、「エコミュージアム」構想を総合計画の基本計画に組み込んだ。「エコミュージアム」は地域全体を博物館として捉え、地域の歴史と風土がつくってきた遺産を地域住民が評価し、保存し活用することによって地域の活力を生み出す考え方で、「屋根のない博物館」ともいわれている。

勝山市には各地区に豊かな自然と人の暮らしが織りなした伝統文化、生活文化、産業文化

と自然景観が息づいており、地域の宝になり得る原石のような素材がたくさんあると考えられたが、住民はあまりにも身近すぎてその価値に気づいていなかった。そこで勝山市全体を博物館と捉え、市内 10 地区を構成ブースとし、住民が学芸員として地域のさまざまな遺産を発掘し、それを磨いてアピールする仕組みを構築した。事業の具体化のために、市内 10 地区にまちづくり団体を設立し、それを構成する「勝山市エコミュージアム協議会」を組織し、1 地区年間 100 万円の事業補助をつけた「わがまちげんき事業」をスタートさせた。初年度からの 3 年間は、「わがまちげんき発掘事業」とし、遺産マップや看板の作成など地域の宝の再確認から始まり、その後、「わがまちげんき創造事業」「わがまちげんき発展事業」として展開。次の 10 年も「わがまち魅力事業」「わがまち魅力醸成事業」「わがまち魅力発酵事業」と展開し、現在は「わがまち魅力発散事業」として取り組んでいる。現在までに市民が実施した事業の総数は、84 団体 319 事業、その事業費の総合計は約 1 億 1 千万円という。

ユニークな事業としては、人口わずか 2 人の限界集落で、古民家再生やエコツーリズムに取り組んでいる市民グループが、エコミュージアム事業をきっかけとして成長し、平成 26 年度に「JTB 交流文化賞」、平成 27 年度に総務省のふるさとづくり大賞「内閣総理大臣賞」を受賞した。また、平成 21 年 10 月に勝山市全域をエリアとした「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク」が日本ジオパークに認定され、その活動をエコミュージアムと共存させたことで、人を呼び、交流を盛んにするまちづくり活動へと展開できたことは画期的である。

勝山市が素晴らしいのは、エコミュージアムからジオパークに至る活動の理念を小中学校の教育に活かし、郷土の歴史学習や、ESD（持続可能な開発のための教育）など自然環境の保全活動に取り組んでいることだ。その結果平成 23、24 年度のアンケート調査では、勝山市が好きだという生徒の割合が小学生で 95%、中学生で 89.4%、高校生で 85.2%となっており、ふるさとに愛着をもった次世代が育っていることは、未来への大きな期待につながる。最高の地域の宝であろう。

今回の都市問題会議では、地域コミュニティの活性化やまちづくりに住民の発想や思いをどう反映し、住民の参加・協働のもとで、地域資源をいかに有効に活用していくかが話し合われた。自治体の役割は、公共サービスの提供のみにとどまらない。多様な住民や団体・企業等が主体的にまちづくりに関わることのできるしくみを整備し、それをつなげていく地域のコーディネート機能を果たすことが求められている。住民の思いを知るためには、積極的に対話をすることが重要であり、住民が真に求めるものを住民とともに創り上げていくことが、満足度、幸福感を高め、結果として「まち」の魅力を高めることにつながる。議員として、市民の声をしっかり聞き取り、いかなる政策が求められているのかを絶えず調査研究し、岡崎のさらなる発展のため尽力して参りたいと、決意を新たにした。

以 上